



たなばたまつり

7月7日は七夕です。人日(正月)、上巳(桃の節句)、端午、七夕、重陽(菊の節句)は、昔から五節句といわれ、それぞれにちなんだお話や行事があります。

七夕は星まつりで、天の川をはさんで東西に位置するアルタイ星とベガ星をけん牛(ひこ星)、織姫(織姫星)と呼んでいます。この二人は仲が良すぎて仕事をしなくなったため、天の神の怒りに触れ、別れ別れになってしまったのです。しかし、それから二人は懸命に働き、一年に一度、7月7日カササギの橋の上で会うことが許されたと伝えられています。

「なるほど 行事ブック」参照



小学生の集い

毎年5月に卒園児を招いて、カレーパーティーを行っています。コロナ感染症が流行したため、行っていない学年があります。7月26日に小学2年生を招いて、ピオトープの観察会后、カレーパーティーを開催します。お兄さん、お姉さんになっている卒園児に会い、どんな話をしてくれるのか楽しみです。

「夢見るこども園」

6月25日に開催いたしました幼児クラスの保育参観には、たくさんの方においでいただきました。どの学年からも笑い声が聞かれ、楽しく過ごして頂けたようで嬉しく思います。これからも地域のコロナ感染状況を考慮しながら保護者の皆さんにも楽しんでいただける行事に取り組んでまいります。

先日、「夢見る小学校」というドキュメンタリー映画を見る機会がありました。この小学校は、「学校法人きのくにこどもの村学園」という私立の小・中一貫校で、日本に5校あり、そのうちの山梨県の「南アルプスこどもの村小学校」での取り組みを紹介されていました。そのカリキュラムは、とてもユニークで国語や算数の時間はほとんどなく、1年生から6年生までが「プロジェクト」と言って、「木工・建築」、「劇・表現」、「料理・農業」など5つプロジェクトのどこかに所属し、1年間それに取り組むのです。実際に取り組んでいる様子を見ますと、子どもたちは、自分で選んだプロジェクトですので、意欲的で、とても楽しそうです。例えば、木工チームでは、のこぎりを引いている上級生のそばで小さい子が板をおさえていましたが、上級生は小さい子の手ののこぎりが当たらないように、そっと自分の手で上からおさえていました。誰かに言われたのではなく、自分の実体験の中で自然に行われたことのように思えました。また、料理チームは、郷土料理作りに挑戦していました。郷土料理を作るには、地元の歴史を調べたり、それを文章にまとめたり、人数分の分量を量ったりしていました。それは、歴史、国語、算数に匹敵する学びであると語られていました。教育評論家の尾木直樹氏がこの小学校のカリキュラムに対して、「2020年度から学習指導要領は、探求型に大きく変わった。今からは、この学校のように主体的、対話で深い学び(アクティブラーニング)が求められる」と話されていました。

みみょうグループで大切にしている「あそびの中に学びがある」といった考えと同じですが、ただ遊ばせているだけではだめなのです。すいこうでは、子どもたちが、「今日は、アトリエでのびるスライムを作ろう」とか、園庭に用意してある大きな画板と絵具を横目で見ながら「今日はこれで遊ぶんだね」と保護者の方と会話をしながらワクワクした気持ち

で登園できるように取り組んでいます。小さいクラスでも朝のお部屋に入ると、クッションの階段やトンネルが用意してあったり、ビリビリに破った新聞紙プールなどが準備してあります。これは、毎日担任が子どもたちの遊んでいる笑顔を思い浮かべながら、お部屋の環境を準備しているのです。こういったあそびの環境を用意することで「もっと遊びたい。」「もっとこうしたら楽しいかもしれない」「お友だちも誘ってみよう」などとあそびは広がっていくのです。そういうあそびを通して文部科学省が示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が育まれていくのだと思います。10の姿と言うのは、「自立心」、「協同性」、「思考力の芽生え」などです。これらは、教えてもらって身につく力ではなく、さまざまな実体験を通して育まれる力だと思っています。この小学校のカリキュラムやドキュメンタリー映画には、色々な意見があるようですが、中学校の卒業式で、「自分がこの学校で過ごした意味を考えながら、今後生きていく」とか「たくさんのことを学んだ。誰かの役に立つ人になりたい」などと、自分の思いがしっかり言える子どもに育っていることを感じました。

すいこうが大切にしている「あそびの中に学びがある」という考えは、すぐに成果として現れない事ばかりですが、10の姿という見えない力が育まっていることを信じて、これからも子どもたちがワクワクするあそびの環境を整えながら、さまざまな体験をくり返して遊んでいきたいと思っています。すいこうは、子どもたちが楽しくて仕方ないという思いで、毎日過ごす「夢見るこども園」でありたいと願っています。

今月は、年長さんが野外活動センターでのお泊り保育に参加します。保護者の方と離れて、仲間だけで過ごす一泊二日。大自然の中で、どんな発見があり、驚きがあり、心を動かす出来事があるのか楽しみです。子どもたちは、今まで少しずつ、すいこうで育んできた非認知能力をフル回転させ、自分のことは自分でやり、時には、友だちと助け合ったりしながら、一泊二日を十分楽しんでくれることと思っています。お泊り保育中に展開される数々のドラマは、次回の園だよりでお伝えできればと思います。

園長

子育てメッセージ



味方に出会うと子どもは変わる

小学3年生の雅樹君は、自分の席について授業を受けない。授業中歩き回って、人の邪魔をする、掃除はさぼるなどと、クラスのやんちゃ者。1、2年生の時は、困った子として関わられていたのですが、3年生の担任井上先生は、「何か燃えあがりたくてうずうずしているんだなあ。子どもってそういう時があるよなあ。」と肯定的に受け止めたその気持ちは、ちゃんと雅樹君に通じたのです。

味方に出会った雅樹君は、自分の本当の姿を出し始めたのです。



これは、日本のペスタロッチーと言われた東井義雄先生の「子どもの心に光を灯す」という本の一説です。

子どもの一面だけを見て、決めつけたりせず、一人ひとりの内面に心を寄り添わせていかななくてはなりません。せっかくであった子どもたち。私たちはいつもこどもたちの味方でありたいと願っています。

